



日本記者クラブ
研究会「オバマのアメリカ」

オバマの「核のない世界」演説を読む ～未来志向の歴史感覚～

西崎 文子
成蹊大学教授

2009年6月15日

「核保有国として、核兵器を使用したことがある唯一の核保有国として、米国には行動する道義的責任がある。私は、米国が核兵器のない世界の平和と安全を追求する決意であることを、信念を持って明言する」（2009年4月5日、チェコ・プラハ）——オバマ米大統領のプラハ演説が関心を集めている。米国の外交の歴史の中に位置づけて、どう読み解くか。西崎さんは「未来志向的な歴史感覚を持っている、非常にいい歴史家だ」とオバマ大統領を高く評価した。

私は、アメリカの政治外交史、歴史が専門として、核問題、あるいは軍事戦略を研究対象としているわけでは必ずしもありません。逆にアメリカの外交あるいは政治の歴史に関して、かなり大づかみに書いたりしゃべったりすることがほとんどです。

ですので、初め、「オバマ外交と核軍縮」のテーマで、という話がありましたときには、やや躊躇いたしました。ただ、オバマ外交の歴史的意義の大きな部分が核軍縮政策の行方にかかっているのではないかといったことを考えますと、やはりアメリカ外交を専門とする者として、たとえ歴史家であったとしてもですが、私なりにこの問題に正面から向き合っていかなければならないという感じがしています。

それから、後でまた触れることもあるかと思いますが、やや個人的なことなのですが、1980年代から90年代にかけて、私は被爆者の通訳として海外で、特にアメリカで「被爆の実相普及活動」というのが日本被爆者団体協議会の言葉ですが、そういった被爆者の実相普及のお手伝いをしてきました。

その過程で、とりわけ被爆者の方々には非常にお世話になっている、というのも変な言い方ですが、いろいろ本当に学ばせてもらいました。ですので、そろそろ逃げ回っていないで、核兵器の問題に関して少し発言しなければいけないかな、といったこともありまして、きょうここに参った次第です。

ということで、本日は、「核兵器のない世界」という構想を歴史的にどのように考えるか、位置づけるか、そういった観点から、あくまでも序説という形でお話をさせていただければと感じております。

オバマ外交の評価は難しい

ただ、核軍縮という本題に入る前に、少しだけ、150日ほど過ぎたところでしょうか、オバマ政権、あるいはオバマ外交の特色について考えてみたいと思います。

オバマ外交をどう評価するのか、これは実はとても難しい問題です。もちろん、その最大の

理由は、まだオバマ政権が発足してから5カ月あまりですので、結果がみえてこないということです。それから、アフガニスタン、北朝鮮、イラク、イラン、そういった前の政権からの問題が山積しており、成果をそう簡単に判断することはできないといったことが、オバマ外交を評価するのが難しい最大の理由だろうと思います。

オバマ大統領が外交だけでなく、経済政策でもかなり大胆に、そして精力的に動いていることは認められたとしても、果たしてそれがどういう成果につながるのかといったことに関しては、まだ判断できないのが正直なところだろうと思います。

ただ、初めにお話ししておきたいなと思いませんのは、それ以上にオバマ外交の評価を難しくしている点が2つほどあるのではないかと、いう気がいたします。

外交とレトリック

1つは、レジュメに書きましたけれども、外交とレトリックの問題です。レトリックという言葉が必ずしもふさわしいかどうかというのは、まだ考えてみる必要があるとは思いますが、一応本日はレトリックという言葉を使わせていただきました。

もちろん、オバマの雄弁さというのが、彼の最大の政治的な武器であるということは、これは間違いありません。大統領選挙を勝ち抜いてきた理由の大きな部分は、彼の卓越した演説にありました。しかし、雄弁さゆえに、実は彼のオバマ外交が、政治とレトリック、あるいは外交とレトリック、そういった問題を浮上させるというか、露呈させることになっているのも否めません。

つまり、いいかえるならば、オバマ政権が本当に言葉どおりの外交を進めるかどうかということに対しての判断が分かれています。これが評価を難しくしているかなり大きな、もしかすると最大の理由かもしれない、と考えています。

受け止め方は4つに分類できる

ご参考になるかどうかはよくわかりませんが、ざっと考えて、オバマのレトリック、あるいはオバマの演説についての人々の受け止め方は、4つに分類できるのではないかと思います。

第一は、オバマのいっていることに賛成して、実際にレトリックどおりに行動するだろうと期待する人たちです。

第二には、彼のいっていることには賛成するけれども、実際には別のことをやるに違いないと考える人たち。

第三は、いっていることには賛成しかねるけれども、行動は、いままでの政権と大差ないから、あまり言葉に惑わされないようにしようという人々。

それから第四には、いっていることには賛成しかねるし、そして、それに準じた行動も危険である、というふうに考える人たち。

この4つに分類するのが可能なと私は考えています。

いいかえるならば、第一のグループの人たちは、オバマが言葉どおり、いままでの軍事力依存のアメリカの体質を変換させて、国際協調主義へとかじを切る、つまり一種のオバマ革命が起こる、そう考えて期待を寄せる人たちです。

それから、第二の人々は、オバマは対話や融和といったことをいうけれども、アメリカの世界戦略はあまり変わらない。変わることもできないだろう。そして、正論の裏には、したたかな計算があるし、アフガニスタン増派にみられるように、結局は軍事力に依存する、結果としては大差ないようになるだろう、と考える。

第三のグループは、第二と裏返しのようなのですが、オバマのレトリックはあまりにもナイーブで噴飯物だけれども、でも、結局アメリカは既定どおりの路線で動いていくだろうと考えます。

そして最後が第四のグループですが、これはチェイニーを思い浮かべていただければと思います。チェイニーのように、オバマのいうこ

とは全く非現実的だけではなく、危険である、それに準じた行動もとても危険である。彼がグアンタナモの収容所の閉鎖について、オバマを正面から攻撃しましたけれども、それが第四の見方である。

おそらくここに集まられた皆さんの中にも、自分はどのグループに入るかというので、実は1から4まで人数は差があるかもしれませんが、そういうふうに分けられるのではないかなというふうに思います。日本のマスコミもそうですけれども、政府内でもそのようなオバマに対する見方のずれがあるのではないかと考えています。

レトリックが政治に持つ意味が取り沙汰されたことは、過去にも確かにあります。割合近い例でも、例えばクリントン政権が **democratic enlargement** (民主主義の拡大) それをいったときに、私は、それはおそらくレトリックだろうと考えましたが、私の友人たちは、クリントンはレトリックを超えたと判断しました。

です、やはりアメリカ政治は特にそうですけれども、レトリックと政治、レトリックと外交というのは、いつもどう評価するかというのが問題になるテーマです。

ウイルソン大統領との類似

いま、クリントンに触れましたけれども、もう一人挙げるとすれば、オバマ大統領をみていて、どうしても思い浮かべて比較してしまうのは、ウイルソン大統領です。私がウイルソンについて勉強しているからということもあるのですが、しかし、類似性というのは確かにありまして、ウイルソン大統領も就任直後から外交における非常に新しい概念を口にしました。

例えば「正義」とか「道義」、これは彼の十八番でありましたし、それから何と「利他主義」という言葉まで使うわけです。その前にあったタフト政権の「ドル外交」とか、あるいはセオドア・ローズヴェルト政権の棍棒外交という、前任者の外交とは全く180度転換する、そういった外交理念を打ち出したわけです。

ウイルソン大統領のそういった外交レトリックの転換は、一部の人には熱狂的に迎えられました。しかしながら、同時に反発や戸惑いも招いたわけです。彼の、特に「利他主義」といったレトリックが政治の場にはそぐわないというふう考えた人もいますし、アメリカの利害を著しく損ねるといった議論もありました。

また、逆に、そういった「正義」とか「道義」、「利他主義」などということを行いながらも、結局はウイルソンも高圧的な、そして軍事力に依拠するような政策をとっているという批判もありました。

そのように、ウイルソンにしても、オバマにしてもですけれども、アメリカの外交の基軸をある程度転換させるといったときには、まずそれをどう判断するか。それが実際的にどのような意味を持つかということ、混乱が起きますし、それと同時に、そういったレトリックと実際の政策との距離、これをみきわめるといった作業がどうしても必要になってくる。その点が、オバマ政権の課題でもありますけれども、いまの時点でのオバマ外交の評価を難しくしている点ではないかと考えております。

イデオロギーを排除する思考

少し長くなりましたけれども、もう一つだけ、オバマ外交の評価を難しくしている要因を挙げたいと思います。

それは、彼の外交が理念を語りながら、イデオロギーを排除する、そういった独特の思考様式をとっているところにあると思います。私がいまいった言葉の意味を正確にご説明するのはあまり簡単ではないですし、それから私自身もまだ考える途中というところがありますけれども、わかりやすくするためには、すべてをアメリカの視点から語り続けた前のブッシュ政権と対比すると、よりオバマの脱イデオロギー性というのがわかりやすいかなという気がいたします。

例えば、アメリカの安全を語るときを考えますと、ブッシュ政権は、必ず外に敵を配置しました。ならず者国家とか、敵か味方か、そういったレトリックが非常に頻繁に使われたこと

は記憶に新しいわけです。しかし、それに対比しまして、オバマはアメリカの安全といいながらも、アメリカにとっての敵、味方の区別はあまりいたしません。テロリストは別扱いになっておりますけれども、しかし、例えばテロリストにしても、ブッシュ大統領がいったように、アメリカをねたむ変質者であり、本質的にゆがんだ人々であるといった、そういった決めつけ方はあまりしていません。全くしていないわけではありませんけれども、非常に少ない。そういった言い方をすることはあまりない。

それから、もちろん「テロとの戦争」という言葉も使われなくなっていますし、アメリカの安全といったときに、必ずそれを脅かす者がいる、そういう構図を立てることを差し控えている。そこら辺に、オバマがイデオロギー的な世界の描き方を控えているという様子が見えかねないかと思えます。

同じように、脱イデオロギーという意味でいえば、オバマは、例えば「自由」とか「正義」といった言葉を、ブッシュ同様、頻繁に使います。まあ、「自由」という言葉は、ブッシュほどは使っていませんけれども、しかし、使わないわけではありません。

ただ、この言葉を、あるいはこれらの価値を、アメリカという国家に結びつける傾向は、あまりみられない。アメリカが希望の国であり、強い国であるということは力説するわけですが、自由や正義を語る場合には、むしろこれを歴史の中に位置づける。過去の歴史の中に位置づけ、そして将来の目標に結びつけて語ったりすることがほとんどです。ですから、アメリカと自由と正義が結びつくのではなくて、歴史の中に自由と平等、正義といった言葉が組み込まれている。

ジャグリングをうまくやっている

これは繰り返しですけれども、自由と平等、正義というのは、これはアメリカとともにあるとずっと続けたブッシュ大統領とは非常に異なっていると考えられます。

その結果として、オバマ大統領は、ビジョンは大いに語るんですけども、あまりイデオロ

ギー的ではない。かつ手段については、あらゆるオプションを残しておく。従来型の政治家、大統領をみなれてきた人々——私も含めてですが——にとっては、極めて評価しにくい像が結ばれるのではないかという気がいたします。

いまのところ、オバマはこういった、いわゆるジャグリング、手品、お手玉とっていいかもしれないですが、それを非常にうまくやっているように思われます。政策の優先順位のつけ方というのをかなり熟知した人物であり、何よりも説明能力が高いですから、たとえ個別の政策に対する反対があっても、オバマの掲げるビジョン全体に対する疑義はあまり大っぴらには起こってきません。

夢を食って生きる

具体的にいえば、例えばアフガニスタンの増派を支持する人は、概してイランや北朝鮮への対話路線に批判的である、あるいはその逆に、アフガニスタンへの増派を懸念する人は、イランや北朝鮮への対話路線を支持する。そういったことがあるわけですが、しかし、それがオバマの外交スタンスそのものへの批判には高じていていないのがいまの時点でのオバマの強みだろうと思います。

そこには、オバマ大統領自身のカリスマ性、それから彼の掲げるビジョンの力が働いているわけですが、とはいえ、これがどこまでもつか。ビジョン、つまり夢を食って生きていくわけですから、夢を食わせて、力に転化させていけるかどうか、これは大きな問題として残ると思います。

少し気になるのは、例えばグアンタナモの収容所の閉鎖をめぐる批判がアメリカ国内あるいは引受先として目されている国々の中でも強まっていますし、逆に、グアンタナモの特別軍事法廷の再開に対する批判も出ています。ですから、左からも右からも、あるいは左右を超えて、個別の政策に対する批判がさまざまな部分から出ています。これがオバマの足を引っ張る可能性というのは、これはないわけではないと考えています。

いまは、彼が非常にプラグマティックである

ということが強みとしていわれていますけれども、もしかするとプラグマティストが今度はオポチュニストといわれるようになる時期が来るかもしれない。左からは右過ぎる、右からは左過ぎると批判される危険もあるのではないかな、という懸念はあります。

“the vision thing”を前面に出す

ただ、いまのところは、彼は“the vision thing”を味方につけているようです。この言葉は、お父さんのほうのブッシュ大統領が、ビジョンというのが苦手だったことからでたものです。レーガンがそれこそレトリックもうまかったし、スピーチが上手でしたし、ビジョンを掲げるのが上手であった。お父さんのブッシュはそれがとても苦手で、自分は、“the vision thing”はだめだ、といったところからいわれる言葉ですけれども、いまのところは、オバマのほうは、この“the vision thing”を前面に、みずからの外交攻勢をかけているといえるのではないかと思います。

そして、そのビジョンのうちで最も野心的なのが、きょうのいただいたテーマであります「核のない世界」にほかならないのではないかと思います。

プラハ演説をきっかけに核軍縮の動き

ということで、次に入りたいと思いますが、オバマ大統領の、「核のない世界」をうたったプラハ演説ですが、これについてはすでにいろいろな議論がなされてきました。この演説と前後して始まった米ロの戦略核削減交渉、それから直後に核廃絶をテーマに掲げた国際会議、これはカーネギー財団が主催したものが朝日新聞などに取り上げられていましたけれども、そういった核軍縮の動きが、この演説をきっかけに活発化したとまではいわないまでも、注目を集めるようになったことは周知の事実であります。

また、このプラハ演説が、北朝鮮のミサイル発射と同じ日の出来事であったこともあって、オバマの掲げるビジョンと、それから現実の国

際関係の困難さとの対比が強調される結果となったことも記憶に新しいことだと思います。

この演説につきましては、そういった意味でいろんな角度から議論がされてきていると思いますけれども、ここでは3つ、オバマ演説に関して指摘しておきたいと思います。

包括的な提案—積み重ねをどう生かすか

1つは、具体的な内容についてですが、オバマ演説というのはとても包括的であった。核廃絶を目指すにはどういうプロセスが必要であるかということ述べる際に、彼の具体的な提案というのは、かなり包括的であったわけですが、と同時に、多くは、これはいままでさまざまな政治家あるいは専門家、そういった人たちが議論してきたものの土台の上にあったものであるということです。

アメリカがまずすべきこととして挙げられているロシアとの戦略兵器削減交渉と条約の締結、あるいはC T B Tの批准は、これはオバマ政権が前の政権から引き継いできた、あるいは前の政権がなし得なかったことを確実にやっていくという意思表示でありました。

それから、N P Tの強化。これは査察と罰則、この両面での強化ということが主眼だと思いますけれども、N P Tの強化にしても、それから核分裂性物質の生産を禁じる条約、あるいは核物質の闇市場の規制、そういったものは、ある意味、いままで積み重ね、積み重ねされてきたさまざまな場での核軍縮交渉の成果をオバマが引き受けて、こういう演説の場でアピールした、そういったものであるととらえていいかと思います。

だからオリジナリティーがない、といたいのではなくて、そういった努力の積み重ねというのがすでにあって、それうどう生かしていくかというところに、オバマの具体的な提案の主眼が置かれていたととらえてよろしいのではないかというのが一つです。

それが1点であるとする、次にお話する2つの点は、やはりこれはオバマでなければ、おそらくあまりできなかったことかなという

気がしている点です。

冷戦の歴史に位置づけた

まず、2番目にオバマの演説が特に際立っていたと私が感じたのは、そういった具体的な政策、いままでの努力の積み重ねの上にある政策を、どのような歴史的な脈に位置づけるか、それをオバマが非常に明確に示したという点ではなかったかと思います。

どうしても新聞報道、テレビ報道、特に新聞報道ですけれども、中身、肉のほうの主眼になって、周りの飾りと思われる部分はあまり重視されないというようなところがあるのですけれども、私はその飾りの部分がとても好きな人間でして、そこにどうしても注目が行くのです。やはり私にとって非常に印象的だったのは、オバマがこの演説をまずプラハで行ったということです。

東西冷戦における象徴的な都市であるプラハ。実際に思い起こしてみると、そのとおりでして、1948年の共産党のクーデターが、東西の架け橋としてのプラハといいますか、チェコを終わらせてしまう。それから、68年の“プラハの春”は、もちろん印象に残る事件です。そして、89年の“ビロード革命”、そういう東西冷戦における非常に象徴的な意味を持つプラハで行い、そして核軍拡を冷戦の文脈で位置づけた、冷戦の歴史の中に位置づけたということを、これはやはり意味を強調し過ぎることはないと思います。

といたしますのも、核の拡散がいま問題になっているわけですが、核の拡散を招いた責任はどこにあるか。これは大体そういう議論をすると、核をイレギュラーに開発したパキスタンとかインドとか、あるいはイラン、北朝鮮といった、そういったところに非難の矛先が向けられるわけです。それはそれで理由はあるわけですが、しかし、オバマはそれだけでなく、あるいは、それよりもむしろ米ソ両国を中心とした冷戦時代に核軍拡競争が行われたことこそが核拡散へとつながった、という議論をしている。そこが非常に大きいと思います。

冷戦を戦った先進国の問題でもある

これは核の問題だけをみないで、もっと大きく国際情勢をとらえていく、あるいは冷戦の歴史をとらえていくともっと明らかになります。つまり、核兵器というのは、東西——後でまた触れると思いますけれども——米ソあるいは米中の対立、直接対決というのを防ぐ役割をしたといえるかもしれない。ここも確実にそうだったとはいえませんが、米ソ間あるいは米中間の直接対決を、核兵器を持つことによって、阻止することはできたかもしれない。

しかし、ご存じのとおり、その間、冷戦時代にはアジアはもちろんですが、アフリカでも中東でも、ラテンアメリカでも、さまざまな地域紛争が、この冷戦の一環として行われました。代理戦争という言葉は、私は使いません。代理戦争ではなくて、地元、土地のダイナミクスがあったり、植民地からの独立の問題があったりという複雑な事情がありますので、代理戦争とはいいませんけれども、しかし、その土地、土地の各地のいろいろな例えば民族自決の要求に対して米ソが介入して、地域紛争があちこちで繰り広げられた。核拡散というのは、それに結びついて考えられるべきものであるわけです。

そういうことまで考えるならば、やはり核拡散というのは、単にパキスタンとかインドの問題ではなくて、冷戦を戦ってきた米ソ中、そしてそのほかの先進国の問題でもあるということは、無論否定できない。少し私の読み込み過ぎであろうという気がしますけれども、しかしオバマは、そういう冷戦の歴史の中に核軍拡を位置づけた、これは非常に重要です。

「唯一核兵器を使用した国の責任」

それに加えて、歴史の問題をお話するならば、もちろんこれは日本のメディアがとても注目したところですが、核保有国のうち唯一核兵器を使用した国としてのアメリカが核軍縮を率いる責任がある、ということを発表した。これもやはり確かに画期的なことでありました。

確かにこの発言は、原爆投下の責任を明言しているわけではありません。私は先ほど、被爆者の通訳をやっていたという話をしましたけれども、最後にそういうことをやらせていただいたのが1995年のエノラ・ゲイ、スミソニアン原爆展が中止になり、エノラ・ゲイだけが展示される、そういう展示会になった。それに対する抗議活動があったのですが、その一環のときに、アメリカで反核団体もそうですけれども、停止する側、中止に追い込んだ側のいろいろな意見などにも接する機会がありました。

それが明らかにするように、アメリカの世論の中では、原爆投下に対する責任を認める、あるいはそれについて謝罪するといったことは、これはかなり難しいことは明らかです。

ですので、オバマとしては最大限、非常に工夫した、非常に慎重なフレーズで、責任というのを投下ではなくて、核軍縮を率いるということに対する責任というふうに表示しているわけです。

抑止論は持ちこたえられない

ただ、やはりここでもまたもう一つ重要なのは、彼が原爆投下に触れたことによって、被爆というのが現実のものであるということを改めて蘇らせたことであろう。これがとても重要な点だろうと私は考えています。

核拡散ということがいわれ始めて、またディメンションが変わってきましたけれども、核兵器というのは、長い間、使われない兵器だというふうに変えられてきた。これも後で少し触れたいと思いますが、だからこそ、非常に洗練された戦略論が起こってきたわけです。基本的には使われない兵器だと思われてきた。

そういう中で、広島、長崎の体験というのは、忘れ去られていく、そういう構造になっていたわけです。それをあえて原爆をアメリカが投下した事実に触れることによって、オバマは、核兵器は使われない核ではないのだ、そして抑止論を前提に物を考えるのでは、これは不十分であって、抑止論というのは、いずれ持ちこたえられなくなるものだ、そういう判断を示している。これは、やはりこれからのそれこそオバマ

外交の課題としての核軍縮あるいは核廃絶、そういった将来への道筋にとって、とても大切な認識であると考えております。

プラグマティックに道筋を描く

そして、プラハ演説の注目すべき点として指摘したい3つ目ですが、これは核廃絶という目標に至る道筋のつけ方です。オバマ大統領が示しました核兵器のない世界というのは、これは確かにユートピア的な目標です。ただ、それに至る道の描き方、これは実はオバマ演説の中では非常に単純明解である。それは問題の本質が、それこそイデオロギー色を排して、極めてプラグマティックに描かれているからではないか、というふうに感じます。

どういうことをいっているのかといいますと、例えばNPTに触れた部分がありますけれども、オバマは“The basic premise is sound”という言葉から始まるわけです。NPTの基本的な前提というのは、これは非常に健全なものである、あるいは正しいものである、それでNPTをどういうふうに説明するかといいますと、核保有国が軍縮をする、核を持たない国はこれを獲得しない。そして、すべての国が核の平和利用を認められる、これがNPTのpremise(前提)だというふうなわけです。非常に単純で、わかりやすい。で、間違っていない。そういう形で説明するわけです。

それから、もう一つ例を挙げるならば、チェコとポーランドがミサイル防衛システムを導入するというので、これはまた国際的に問題になっていますけれども、これに関しても、例えばイランからの脅威が継続すれば、ミサイル防衛を進める。しかし、イランからの脅威がなくなれば、それはより強力な安全が得られるということの意味するので、ミサイル防衛を導入する理由はなくなる、というふうなわけです。

いいかえるならば、核兵器の廃絶という目標が明確に定まっているために、それに資することのない考え方というのは排除されるわけです。ですので、例えばテロリストに核を渡してはならないという議論はありますけれども、例

えばアメリカの核とパキスタンの核のどちらが道義的に優位にあるか、そういったような議論にはオバマは触れないわけです。要は、そういった議論をすることによって、核兵器を廃絶するという目標が確実に遠のくというのが彼にはみえている。ですから、ある意味では非常に単純化された、しかし疑問の呈しようのない、そういった骸骨のような、骨格の部分、それを非常に明快に述べるということになっているわけです。

「希望」—問題の本質をとらえるメッセージ

その結果として、かなり単純ですけれども、しかし、問題の本質をとらえるようなメッセージ、例えば「核の恐怖」でなくて、「希望」とか、あるいは「協調こそが勇氣ある行動である」、そういうオバマ節が浮かび上がってくる。それが、先ほど一番目にお話ししました具体的な条約であったり、闇市場の禁止であったり、そういう具体的な政策のリストをつなぐものとして出てくる。

もちろん、すでにお話ししましたように、こういった言葉がすべてアメリカの覇権維持、アメリカが核独占をする、そのための粉飾だという人もいらっしゃるかもしれませんが、逆に、あまりにもナイーブ過ぎないか、NPTをそういうふうに表現すること自体、あまりにも単純過ぎないかと思う人もいるかもしれませんが、しかし、同じぐらいたくさんの人々が、いまのところオバマ大統領の方向性、オバマ大統領の論理力、それから構想力にけるつもりでいるのではないかという気がしております。

歴史的な文脈にどう位置づけるか

そして、次に行きたいと思いますが、オバマの核のない世界の構想が、では、どのような歴史的な意味を持つのか、あるいはどういう歴史的な文脈に位置づけられるのか、それを考えるために、次に話をしたいのが、核と平和に関する議論の変遷です。

これも先ほどお話ししましたように、私は必ずしもこれを専門にやっているわけではあり

ません。本当に大づかみにとらえることになり
ますし、時間の関係で、かなり、はしょろうと
思っていますけれども、やはり歴史を振りかえ
ることから将来への道が少しでもみえてくる、
そういった問題意識から、話題提供という形で
話をさせていただきたいと思います。

原爆、核と平和、あるいは原爆が国際関係に
持つ意味、これの議論は多くの方がご存じか
もしれませんが、そういった議論が始まった
のは、実は原爆実験が成功するより少し前の
時代のことでした。1943年、44年、次第
にマンハッタンプロジェクトあるいは原爆が
成功するかもしれないという事態が現実味を
帯びてきた時代といっていると思います。

これはマーティン・シャーウィンという歴史
家がかかなり詳しく書いており、これも70年代
の著作ですけれども、その後もいろいろな研究
者が触れていることですが、やはり一番
初め、原爆をめぐる政治的な、国際関係にどう
いう影響を与えるか、それに関する根源的な議
論というのは、その時期、44～45年あたり
に始まっています。

原子力の国際管理体制を構築する

割合単純に2つの立場がありまして、一方
は、核兵器の破壊力、あるいは原爆の破壊力、
これは野放しにしておくにはあまりに危険で
ある。ですので、国際管理体制を構築するこ
とが急務であるという考え方が一方であり
ました。これは原爆実験が成功する前の話
です。1944年あたりの話です。

とりわけデンマークからアメリカに亡命し
ていた物理学者のニールス・ボーア、彼は核開
発、原爆開発にかかわった人ですが、彼が代
表格だったわけですが、彼にいわせると、
とにかく核兵器の破壊力は、これはとても恐
ろしいものがある。しかも、原子力の秘密、
原爆を製造するための秘密を、ある国が占
有し続けるということは不可能である。そ
うであれば、原爆開発計画、これをその時
点でソ連に知らせることが絶対必要ではな
いか。そうやってソ連の信頼を得ること
によって、当時の第二次大戦中の大同盟、
米ソを軸とした原子力の国際管理

体制をつくるのが可能になる。これが、ア
メリカで原爆開発をしてきた人は本当に限
られていますけれども、その一方にあった考
え方であったわけです。

要は、破壊力の大きさ、秘密が守れない、
科学者の直観ですね。科学者の自分がここ
で発見したことが、次の瞬間、世界の反対
側で発見されるかもしれない。逆にいえ
ば、その恐怖をいつも持って研究を進めて
いる人たちですので、ボーアもそういう
ふうを考えていた。そうであれば、一生懸
命秘密を隠そうとするのではなくて、これ
をあえてソ連に伝えることによって信頼
を得ていく、それが米ソほかの国々にと
っての利益である、それが一つの考え方
であったわけです。

ハイドパーク協定で却下

しかしながら、ローズヴェルト大統領、
そしてチャーチル首相はこれに正面から反
対しました。彼らは1944年の9月にハイ
ドパーク協定というのを合意するわけだ
けですが、この中で、いまいましたよう
なボーアの提案を正面から却下していま
す。将来の国際管理を目指すために、原
爆の秘密をソ連に与える、こういう考
え方は受け入れない。ほぼこのとおりの
文面がここに書かれています。

しかも、それだけではなくて、これから
ニールス・ボーアのような人が、特にロ
シアにそういった情報を漏洩しないよう
に、これは気をつけて見守る必要があ
る、といったことも合意されている。原
爆スパイの疑いが、それから5年あた
り、マッカーシズムの時代までアメリカ
社会を揺るがしますが、一つの萌芽とい
うのがここにあったということもでき
るかもしれません。

いずれにせよ、ここに原爆あるいは核兵
器に対する基本的な考え方の対立が実
は出ているというのが私の考え方です。
一方では、秘密は守れないのであれば、
いっそのこと信頼醸成による平和を目
指そうという考え方。そしてもう一方
では、むしろそうではなくて、少し
でも相手の先を行って、そのマージ
ンを利用して、何か自分たちの目的
を達成しようとする考え方。

れません。実際には、かなり難しかったと私自身も思います。米ソ対立がかなり構造化していき、それから何よりも原爆はアメリカにとって、トルーマンの言葉をかりるならば、「神が与えた神聖な委託物である」、そういった言葉で原爆の保持、あるいは原爆投下を正当化した、そういった経緯もあります。

ですので、ここで、ある意味ではアメリカが自分の **Winning weapons**（勝利の兵器）を供出して、そして国際管理に移行する、それが世界平和につながるのだ、そう発想することは、もともとちょっと難しかったかもしれません。

1945～46年がアメリカの分岐点だった

しかしながら、私が強調したいのは、だから、ここでバルーク案あるいは「アチソン＝リリエンソール報告」がつぶれてしまって、核競争が本格化したということだけではなくて、それだけではなくて、核兵器の破壊力にまなざしを据えて、管理体制の成立を、そのほかの政治的ないろいろな配慮よりも優先する、そういうオープンハイマー的な考え方、それが存在したということがまず重要ではないかと思います。

そして、この時期、1945～46年にかけては、そういった分岐点に立ったアメリカは、核独占を可能な限り維持するという、むしろとりやすい道、安易な道をとったということが指摘できるのではないかと思います。

それが一つ、核問題、特に核廃絶を掲げたときに、あるいは核の平和利用以外の軍事利用はすべて国際機関にゆだねる、その構想をもしこれから考えていくとすれば、何を基本的に考えなければいけないか。そういったときに、アチソン＝リリエンソール報告とバルーク案との対立、あるいはこの場でなされた議論というのが、もう一回振り返るべきものではないか、というのが私のここで申しあげたいことです。

それが一たん決着をみる、核の国際管理体制というのが一時遠い夢となったその後のアメリカの核と平和の議論というのは、これは主として戦略的な議論を中心に繰り広げられることとなります。

核抑止論は国家の核保有が前提

時間もありませんので、ここではあまり中身には入りません。

申しあげたいのは、まず一つは、核抑止論というふうに書きましたけれども、いまお話ししましたように、核の国際管理をめぐる対立とは違って、これは、常に戦略面を重視した議論であったということ。その意味では、核兵器というのが、ある国家の保有するものとして構想される、共有のものではないわけです。国際管理体制のほうは、核をすべての世界があまねく持ち得るものだ、その前提から始まっているわけです。けれども、核抑止論は、そういう核兵器あるいは核エネルギーが共有のものではなくて、国家に所属するものとして構想されていることが一つ。そのうえで、自分たちの持っている核をいかに有効利用するか、まずそれを前提にした議論がそれから今日に至るまで続けられたということが第二点目です。

相互確証破壊のシュールな世界

それから、第三点目をいえば、核抑止論を考えるに当たって——これは説明もなしにお話しして申しわけないんですが——幾つか考える基準があるとすれば、一つは対称性なのか、非対称性なのか。我々は、いまは相互抑止を割合よく考えて、例えば米ソがバランスを持った抑止を行う、相互に抑止し合う相互抑止が維持されているところでは、平和は維持される、そういった冷戦的な思考にいままで比較的慣れてきました。

しかし、初期、1950年代までをみますと、核抑止というのは、全くそうではなくて非対称だったわけです。アメリカが圧倒的な核を持って、そして、ソ連の赤軍の動きを、ソ連軍の動きを抑止する、そういった非対称な抑止というものを考えられていた。それが次第に相互抑止という考え方になって、核と核の抑止論というのが出てくる。

しかし、それで核の手詰まり状態が出てくると、今度は、むしろ限定核戦争、そういう考え方が出てきて、使える核という道が模索される。

キッシンジャーは、いま核廃絶をいい出してまた注目されていますけれども、彼は実は限定核戦争の旗振り役をやっていた時代もあったわけです。

そうやって、核戦略が非常に洗練されていて、相互抑止というものが生まれ、それが相互確証破壊、お互いにお互いの国民を核の脅威にさらすことによって抑止あるいは平和が維持されるという、非常にシュールな世界が出てくるのが60年代から70年代です。

レーガンの直感的な判断

おもしろいのは、その後にレーガンがこれをぶちこわすような政策をしたことだろうと思うのです。レーガン政権は、中距離核を配備して、アメリカがソ連に対して核の優位に立つことに非常にこだわりますけれども、しかし、それと同時にSDI構想というのは、これは彼が直感的に、いわゆるMADといわれる相互確証破壊、これの道義的な問題点、先ほどシュールだというふうにいいましたが、どう思っても安全を守るというのに核にさらすというのはおかしいではないか、そういった彼としては直観的な判断、これがレーガンのSDI構想の裏にはあるのではないかと思います。

ですので、戦略としては軍拡につながる、そして米ソの核のバランスを崩すものではありませんけれども、しかし、彼の直観というのは、やはり我々はまた考える必要があるのではないだろうかと思えます。

信頼醸成による平和のビジョン

ということで、最後に入ってしまいますけれども、こういった原爆管理をめぐる初めの議論があり、そして非常に洗練された核抑止論があって、そしていまがある、そういうふう考えたときに、私はやはりオバマ演説と重ね合わせて、我々は一体何を考えるべきかということをもう一度確認することができるのではないかと思います。

1つは、いまいいましたように、核抑止論というのは非常に洗練度を高めましたけれども、

しかし、非常に原理的な、自分が優位に立つことによって相手の嫌な行動を防ぐ、そういった非常に原始的な、あるいは基本的な考え方がある。

私たちがみている世界というのは、そういう非常に洗練された核戦略から、非常に原始的な抑止の考え方、あるいは防衛の考え方、それが混在している世界であるということです。

ですので、ある意味では、そういった核戦略論、あるいは個別的な安全保障、それに焦点を合わせてしまうと、核軍縮あるいは核廃絶の道は、決してみえてこないということが一つです。

言い方を変えるならば、いま問題になっているのは、そういった抑止論とか派生的な理論あるいは軍事戦略が蔓延する中で、先ほどお話しした、オープンハイマーとかボーアの唱えたビジョン、つまり信頼醸成による平和、あるいは核の軍事利用を全面的に放棄するというビジョンを私たちが見据えることができるかどうか、ということになるのではないかと考えています。

将来を見据えた歴史観を頭の中に

先ほど、オバマ大統領の演説が非常に特徴的なのは、彼が非常にユートピア的な世界を描くびだけれども、それに至る道筋として、非常に単純なことをいっている。NPTの前提はこうであり、それは論理的に正しいと、非常に単純化された図式を示した、というふうにお話ししました。

それは、ある意味では、オープンハイマーとかボーアが描いたビジョンと非常に似通っています。核の国際管理をやるには信頼醸成が必要である。信頼醸成をするためには、核の情報を共有しなければいけない、これも非常に単純な構想なわけです。で、論理的には非常に筋が通っている。

しかしながら、我々の世界というのは、そうきれいではなくて、いまいいましたような核抑止論とか、あるいはさまざまな抑止論とか、さまざまな戦略とか、とにかくありとあらゆる対立がある。そのギャップを埋めることがとに

かく重要なわけです。

それは、この構想自体をナイーブだといって拒否することから始まるわけではない。ある意味では、ナイーブな構想があるということを前提に、そして、それが目指す世界であるということ、それを見据えたうえで、個別の厄介な問題に取り組んでいかなければいけない。

そういうとらえ方、それはやはり将来を見据えた歴史観だと思いますけれども、過去から現在へ、そして現在から未来へ、そういうときの流れの中に位置づけられる歴史観ではないかと思いますが、それを私たちの頭の中に埋め込んでおくことができれば、オバマ大統領の核廃絶演説もこれから長い道のりかもしれませんが、その方向へと向かっていけるのかなというような気がしております。

長くなりましたし、後のほうは完全にはしよってしまいましたけれども、これで終わります。

質疑応答

オバマ大統領が広島に来る可能性は高い

司会 (中井良則・クラブ事務局長) それでは、皆さんからの質問に答えていただきます。皮切りに、私から質問しますが、オバマ大統領のビジョンの中で、オバマさんが広島、長崎に来るという可能性はあるのでしょうか。もしオバマが広島、長崎に来た場合、どういうメッセージを出すのでしょうか。

西崎 とても魅力的な質問ですけれども、難しい質問でもあります。

オバマ大統領が広島、長崎に来る可能性というのは、これはなくはないと思いますね。いままでの最大のチャンスだろうと思います。ペロシがすでに来ていますし、オバマが自分の支持基盤をきちっと固めておくことができれば、広島、長崎に来る可能性は非常に高い。かなりあると思います。

何をいうだろうというのは、これは難しいで

すけれども、少なくとも彼のいままでの演説から考えるに、彼なりの歴史認識、どういうスピーチがあるかというのはわかりませんが、それは第二次大戦の歴史認識であるとともに、やはり核時代に関する彼の認識を明らかにするであろう。それ以上はちょっとわかりません。

G8でアメリカの位置が高くなった

質問 冷戦構造の中で核の問題をとらえられていたので、追加でお伺いしたいのですが、同じく冷戦の産物であるG8は民主主義の国家の集まりという形で世界をリードしていこうという組織でした。そういう流れだから、ロシアも入ってきて仲間だが、中国は民主主義国家じゃないから入らない、という議論がされています。オバマの見方からして、G8の存在は、どのようなものになるとお考えですか。

西崎 オバマは、非常にプラグマティックな人だというのがまずあるんですけども、G8を利用——利用というのは悪い意味ではないんですけども——その場を活用することができるのであれば、それはメンバーシップに中国が入らないとか、ロシアが入っている、どちらが民主的とか、そういったことはあまり詮索しないで利用すると思うんですね。

いまG8ができることというのは本当にたくさんありますので、彼としてはその場を活用していく。そして、もう一つ興味深いのは、G8の中でアメリカの占める位置が、おそらくオバマになって高くなっている。先進国の中でのリーダーシップをとる指導者というのが、ブッシュではちょっとやり切れなかった。

ほかにヨーロッパに、例えばシラクのような人もあまりいない。となると、やはりオバマにかなり注目が集まっているのが現状だろうと思います。それはオバマ人気だけという面もあるかもしれませんが、それだけではない。

その意味では、オバマにとっては、G8というのは非常に利用しやすい場所であると思いますし、先進国の中の協調というのは、これか

らもっと必要になってくるという認識があると思います。中国をどう扱うかとはまた別の問題ですけども、場として利用するという事ではないかという気がいたします。

核廃絶をうたう人物として広島に来る

質問 オバマ大統領の広島・長崎訪問ですが、原爆によって戦争が早く終わりとくさんの生命が救われたという認識がアメリカでもあります。問題は、日本の戦争責任というか、戦後処理の問題も絡んでくるわけですね。いまのオバマ広島・長崎訪問論は単純過ぎるんじゃないかという気がするんですが。

西崎 ありがとうございます。とても大きな問題で、いろいろお答えのしようがありますし、考えようがあるかなという気がします。ただ、日本の戦後処理、戦争責任の問題、これはアメリカに対してというよりは、むしろアジアに対してやらなければいけない、そちらのほうが度合いは高いと思うんですね。アメリカと手打ちをするという感じのものでは、もちろんないわけですね。そこは日本の戦後処理の問題は、まだまだ残っているものとして、私自身はとても強く認識している、ということをお話しておきます。

ただ、広島、長崎というのは、それだけの問題ではないと私は感じています。先ほども申しあげましたように、被爆者と長い間つき合ってきたということもありますし、例えばアメリカにおける被爆兵士の問題とか、そういったことを考えますと、やはり核兵器というのは、——それは戦争終結を早めるために使われたのか、そうでないかという議論とはまた別の問題として——、人類共通の問題だろうと思うんです。

広島、長崎は、たまたまその一つの場所であったととらえることができると思いますので、オバマ大統領が広島、長崎に来ることは、アメリカの大統領として来るという意義もありますけれども、やはり核廃絶をうたう人物として来るという意味では、非常に重要であろうというふうに考えます。

アメリカの国民がどう考えるかというのは、これはおっしゃるとおりだと思います。いまでも、やはり終戦を早めたと考えている人はたくさんいますし、それから、人の命、例えば自分のお父さんがそのために救われたとか、そういう個人的な記憶というのはとても強烈ですので、それは残ると思います。

ただ、それを超えるメッセージを出せる人物がいるとすればオバマ大統領ぐらいかな、そういう印象ですね、いまのところは。

核テロが起こると3つの反応が出る

質問 仮に、国家でない者による核のテロが起きた場合に、核をめぐる論議というのはどういう変貌を遂げていく可能性があるか、頭の体操のようですけども、ご意見を伺いたいと思います。

西崎 核兵器というのは、ある意味で特殊な兵器で、自分が危険を感じたときに、それを持ちたいと思う人たちと、危険はあるかもしれないけれども、やっぱり持ちたくないと思う人々と2つに分かれると思うんですね。ですから、どういう状況で、だれによってどこにという問題はもちろんあると思います。頭の体操だとおっしゃったので、そういうことはあまり考えないとすれば、やはり両方のリアクションを呼び起こすのではないかと。

核テロが起こったときに、直観的に、「やっぱり核兵器というのはとにかくだめだ。廃絶しなければいけない」という方向に向かう動きと、それから、「やはりそんなナイーブなことをいってはいけません。核に対応する——それこそミサイル防衛なんかはその典型だと思いますけれども——よろいをつけなければいけない」というのが2つ目だとすれば、もう一つは「やはり核テロを牽制するうえでも核武装をしなければいけない」。

そういう3つの考え方が、頭の体操として論理的には出てくるだろうと思うんですね。それをどういうふうにコントロールしていくか、逆にいえば、それぞれの国がそれぞれの3つのう

ちのどれを選ぶかというのがばらばらしている状況というのが一番核拡散につながりやすい。

どこかで核テロが起こった場合でも、国際的にそれをマージナライズするといいますか、それを局部的なものにする努力というのはしなければいけないわけで、それもやはり核兵器のない世界に向かうときには、おそらく一番初期の課題ではないか、というような気がします。

アメリカが転換してもついていけない日本

質問 オバマのプラハ演説に非常に感心したんですが、日本としてどう対応したらいいでしょう。

西崎 おっしゃるとおりで、やはり日本は政府レベルではとても受身で反応がにぶいという気がします。

理由は、多分いくつもあって、一つは、本当に北朝鮮の問題だと思うんですね。北朝鮮の脅威論というのが非常に強い。実際にきな臭いことをやっているのも事実ですので、そういう状況の中で核の傘に頼りたいというのが、まず日本政府の、おそらく本当に公式的な立場だろうと思うんです。

さらにいうならば、アメリカが核の先制攻撃を、核を持たない国に対してやらない、そういう声明を出すようなことに対しても、日本は非常に実は賛成していない。ですから、やはりアメリカの核は自由に使ってもらいたいと思っているところがほのみえているのではないかと思います。

理想としては、もちろん日本が日本政府としてオバマの核のない世界には全面的に賛成する、そしてその理由を述べる、そして、先ほどの広島、長崎にしても、ぜひオバマさんには来てほしいというメッセージを送る、いろいろやりようはあると思いますし、やってほしいと思います。

ただ、日本がいままで、この核問題、あるいは原爆の問題に日本政府がどういうふう

に向かってきたかということを考えますと、ある程度、こういう流れで来たんだなという——これはあきらめではないんですけども——批判的な視点というのもあります。先ほど申しあげましたように、被爆者の問題をみても、やはり被爆者に対しての補償が非常に長い間かかってやっと、徐々に、いまでもまだ進行中という形で進んできたという事実で、その間、ずっとアメリカの核に対する負い目といいますか、核の傘の下にあるという、あるいは核戦略の中に日本が組み込まれている、そういったことにがんじがらめになってきたという日本政府のこれまでの経緯からすると、やはりここに至ってアメリカが政策をちょっと転換しても、日本がついていけない、というのが実情ではないかなと思います。

私が期待するのは、もっと市民レベル、NGOでもそうですし、被爆者運動でもそうですし、このごろは幅広い支持層をもつ平和運動がたくさんあります、そういった人たちが日本の原爆に対する拒絶をくみ上げてくれるのではないかと、そこにむしろ期待します。

選択の余地のないものをたくさん抱える

質問 今後、オバマが大統領として何かやっていくときに、プラグマティックな処理をしなければならぬと思いますが、理念的な部分、ビジョンの部分とどう整合するのでしょうか。

西崎 ありがとうございます。とても難しいご質問で、大体、オバマのビジョンがどこから発し、どこへ向かっているのかということも含めて、まだまだ私も理解できていない部分があるんですけども、例えば国内政策のレベルで、GMを救出するとか、そういったことに関しては、彼はプラグマティックといいますか、おそらくあまり選択の余地がない、そういう場面で動いているということが一つあると思います。

実は、オバマは選択の余地のないものをたくさん抱えているわけですね。それが彼の政策の80%を占めている。もちろん、その中で政策

判断はしますけれども、そういう状況にあるということがまず一つ理解すべきなんだろうと思います。

それから先のビジョンなんですけれども、これもおっしゃるとおり、選挙が終わる前と、それ以降というのは、これは違ってきているという感触はあります。どちらかというところとプラグマティズムが目立つところもあるかと思えますけれども、ビジョンに関していえば、特に、一つは外交に関するビジョンは、かなり彼は自由にいまでもやっている。

やはり象徴的なのは、先ほどの核廃絶の演説をプラハでやっている。それから、カイロのあの演説がありますね。対外政策、あるいは外国でやる演説に彼の大きなビジョンというのが非常に大きく盛り込まれている。

それが国内でどう受けとめられているのかというのは、実は私も気になるところです。国内でも、もちろん論評はされますけれども、でも、アメリカの人たちというのは、一般的にはそれほど対外関係に関心がありませんので、むしろスタンドプレーとして、アメリカ国内向けには終わっていることもあるかもしれません。

国内政策でもビジョンは生きている

では、国内向けにはどうかということになるんですけれども、私は、ある意味では、トーンは変わったけれども、オバマのビジョンというのは、国内政策でも生き続けているとは思えますね。それはいまとなっては融和とか、共和党と手をつないでとか、そういうことはなかなかいえなくなりました。しかし、やはり社会政策において、弱者——弱者という言い方はこのごろしないかもしれませんが——いままでフェアに扱われていなかった人に対して、優先して国内政策を行っていくとか、一番大きいのは、やはり教育だと思います。将来に投資するという姿勢で、特に教育、ハード面ではなくて、将来の人的な資産をつくっていく、そういう面に投資していくという姿勢、そういうのを考えると、やはり彼のビジョンというのは、生きているのではないかと。

いまのところ、それがあから、比較的高い支持率を維持できているんだろうというふうには感じます。

質問 オバマ政権の外交方針をだれが決めているのか。ヒラリー・クリントンというパワーのある人が国務長官にいて、いままでの数カ月を ごらんになって、オバマ外交というのは、オバマ本人が決めているんですか。それとも、ほかの人が発言権があるんですか。

西崎 ほかに人ももちろん発言権はあると思いますけれども、やはりオバマだと思います。オバマのリーダーシップが特に外交では非常に強い。クリントンはもちろん非常に有能だし、知識も経験もあるというところはありますけれども、それからバイデンももちろんそうですけれども、やはり外交姿勢、特に包括的なビジョンというのは、これはもうオバマから出てきていると、いいのではないかと思います。

オバマは歴史の暗い部分をいえる人

質問 オバマの歴史感覚というところなんですけれども、プラハ演説の後に、もう一度オバマはヨーロッパに行って、ブッヘンヴァルトの強制収容所の跡と、ドレスデンという無差別爆撃のあった都市と、それからノルマンディーを回りました。そういう場所の選択とか、そこでのスピーチをみて、オバマの戦争とか平和に対するビジョンというのは、どんなメッセージを読み取られたか、教えてください。

西崎 とても魅力的な質問が多くて、たくさん答えたいといいますが、いろんな想像力がわいてきてしまって、まとまらないお答えにしかならないものが多いんですけれども、ブッヘンヴァルト、ドレスデン、ノルマンディーで、特にこれはカイロから後に行っているわけですね。で、どこまでそれを緻密に計画したかというのは必ずしもわかりませんが、カイロでやはりパレスチナ、イスラエルの問題に触れて、その後、ブッヘンヴァルトに行く。

もちろんカイロの演説では、ホロコースト・ディナイアル (denial) をはっきりと否定するとともに、二国間、パレスチナの権利ももちろんいっている、そういう計算というのは非常にあると思います。ただ、だから、計算高いという否定的な意味を持つのではなくて、それ自身がやはりオバマの歴史感覚を非常に示している。

あえていうならば、やはり善悪を本質論的に決めない。事の悪さ、ブッヘンヴァルトのおぞましさというのは、これはもちろん認めるわけですけども、しかし、何というんですか、うまく表現できないんですけども、それと、例えばいまのドイツというものは、これは切り離して考える。現ドイツの指導者たちとブッヘンヴァルトに行くわけですから、そういったところで、歴史に対する強い認識はあるけれども、それがそこでとどまるというところはあまりないのではないか。

もう一つ、違う言い方になるかもしれませんが、オバマは歴史の暗い部分、これを非常にいう人だと思います。ブッヘンヴァルトも、それは西欧の歴史としての闇の部分のいつているわけですけども、もう少し質は違いますけれども、例えばカイロの演説では、アメリカのモサデックに対する関与の仕方とか、そういったことをいうわけですね。珍しいことだと思うんです。

ですから、そういった否定的な過去をそれぞれが持っていて、それについての善悪はもちろんある。だけれども、それがいま生きている人たちの善悪と、必ずしも一直線につながっているというような、そういった見方はしていない。

一言でいうのはちょっと難しいですけども、私からみますと、かなり未来思考的な、しかも光の部分だけをいつているから未来思考、というのとはまた別の形の未来思考的な歴史感覚を持っている、非常にいい歴史家だというふうに思っています。

オバマの頭の構造は——普遍的な問題とアメリカの利害

質問 プラハ演説に、私自身はあまり反応し

ませんでした。コントロールがきかない、条約に加盟していない国々に核が広がるのは恐いので、米国はそれと戦うので、NPTに加盟している核の保有国も、保有していない国も支援してください、というメッセージのように私はとったので、日本の原爆投下に謝るとか、そういう話ではないと私は思ったんですが、ちょっと簡単過ぎますか。

西崎 テロリストが核を持たないというのは、多分、世界の99%以上の人たちの利害だと思うんですね。それに対する手段が、アメリカがそれをやるんだということで、それに支援してくれという形になるのか、それともアメリカだけでなく、やはりそれは世界共通の体制をつくったほうがそれを有効にできるのか。オバマ流の考えだと、有効性というのをとても重視すると思うんですね。その場合に、すべてのテロリストに核を渡さないということをアメリカだけでやれるとは思っていない、と考えていると思います。

です、まず何が目的なのかということを考えてときに、核の脅威というのが目的である。いまの時点では、確かに一番恐いのはテロリストの手に核が渡ることだ。そこまでは共通認識で、あとは手段の問題だと思うんですが、では、どうしたらといいますか、どのようにしてテロリストに核が渡るんだ、そこが歴史認識だと思うんですね。

オバマの場合は、テロリストに核が渡るの、テロリストになるような人たちが生まれているということがあって、核はどこにでもあるわけです。そういう判断をするならば、必ずしもテロリストの核だけに注目するのではなくて、もっと包括的にこの問題には対処しなければいけない。核というのは無駄な兵器であるということを含めて、対処しなければいけない、そういう論理構成になっていると思うんですね。

です、それがアメリカの利益だから、アメリカ個別の利益を追求しているのか。それとも普遍的な利益を語りながら、アメリカの利益を追求しているのか。それはブッシュ政権のときには非常に鋭角的に出てきた問題だったと

思います。オバマは、1、2、3、4とさっき
類型化しましたがけれども、私は1と2でどっ
ちへ行こうかなと迷っているような状態
ですので、オバマのビジョンというの
はかなり信じています。それが実現する
かどうかというのはまた別ですが、彼
の頭の構造は、そういうふうに普遍的
な問題としてとらえることがア

メリカの利害に反することはない、
というふう考えているんじゃないか。

ちょっと回りくどいお答えになりました
けれども。

(文責・編集部)